

社会言語学的記述についての一考察

——会話分析の視点から——

若松美記子

一 はじめに

人々は日々のさまざまなコミュニケーションを行うなかで、いったい、何者としてそのときどきの場面に居合わせているのだろうか。このような疑問は、一見、簡単に答えを得られそうにみえて、実は困難な問題を孕んでいる。というのは、社会学者のサックス (Sacks 1972a, 1972b) が指摘しているように、コミュニケーションを行うなかで、人々が何者であるか、つまり、人々がどのような社会的アイデンティティを担っているかについては、無限大の「正しい」記述の候補がある一方で、そのような記述と区別できる「レリヴァント(適切・有意味)」な記述があるからである。

たとえば、ある人物がレストランという場面において、「客」「会社員」「日本人」「父親」であることは、いつでも「正しい」記述ではあるけれども、その記述がいつでもその場面において

「レリヴァント」であるとは限らない、というわけである。たしかに、人々は生物学的に規定される「ヒト」である以上に、さまざまな場面において、なんらかの社会的アイデンティティを担って、言語的・非言語的コミュニケーションを行っている。そうであるならば、コミュニケーションを観察・記述・分析する立場にある者はどのようにして、この「レリヴァント」な記述というものを入手することができるのだろうか。

この小論では、コミュニケーションにおける「レリヴァント」な記述を入手する方法について考察してみようと思う。考察の対象としては、特に、実際のコミュニケーションにおいて人々が使用することばの特徴と彼らの社会的アイデンティティとの関連性を探究する社会言語学における記述(以下、「社会言語学的記述」)の方法を取り上げて、会話分析 (conversation analysis) の視点から考察してみたい。

以下では、まず、筆者が仮に、「当事者主義」と名付けた社会言語学的記述の指針について取り上げ、このような指針においては、いくつかの方法論上の困難があることを指摘したいと思う。「当事者主義」とは、この小論においては、「当事者による(判断・認識・経験などの)申し立ての方が、当事者以外の人物(＝観察者や分析者など)による観察などよりも、信頼のおける記述である」という社会言語学的記述の指針⁽¹⁾を指し示すことにする。次に、一九六〇年代のアメリカで社会学者のサックス

スやシエグロフらによって創始されたとされる会話分析の知見を導きの糸としながら、「当事者主義」の方法論上の困難にたいして、一つの解決策を提示してみたい。そうすることで、コミュニケーションにおける「レリヴァント」な記述を入手する一つの可能性について、具体的なデータを分析することを中心にして探っていきたいと思う。

二 「当事者主義」における一つの誤謬

社会言語学的記述には、たとえば、ラボフ (Labov 1972) の研究に代表されるように、マクロな社会構造をあらかじめ与えられた現実として扱い、それを統計などの記録に基づく定量的データの分析によって明らかにしようとする立場がある。このような立場においてまず第一に重要な作業は、観察者が観察対象である言語活動に関連したいくつかの社会的アイデンティティを前もって設定し、記述することである。これらは、のちに分析結果として提出される人々の言語使用の特徴を説明するための変数として用いられるからである。

しかし、このような統計的相関性を重視する立場は、近年、たとえば、フェミニズムの立場から社会言語学的研究をおしすすめているカメロンによって批判されている。(Cameron 1990, 1996) カメロンは、定量的データに基づく社会言語学的記述においてはしばしばとりこぼされてしまいがちな「制度や社会化

実践による言語規範の生産と再生産の問題や、それらの規範がどのように個人に気づかれ、受け入れられ、抵抗され、覆されるのかという問題、そして、それらの規範とアイデンティティの構築との関係はどのようなものなのか」(Cameron 1991: 88) という実際に言語活動に参加している人々の判断や経験、認識(過程)の側面を取り上げなければならないと注意を喚起している。実際に、ある特定の社会的アイデンティティの特徴と見なされていることばを使ったり、行為を行っている人々が、まさにその社会的アイデンティティに所属しているかどうかという側面を考慮した上で、観察者は社会言語学的記述に従事しなければならぬというのである。

では、カメロンが提言しているような、言語活動を行っている当事者の判断や経験、認識(過程)を分析の俎上に乗せて社会言語学的記述を行うためには、どのような方法があるだろうか。カメロン自身は、言語活動に関わる当事者のメタ言語活動(たとえばフェミニズムの言語改革運動)に焦点をあて、そのような活動にまつわる言語規範の生産や再生産の過程がみられるテキストの分析をしている(Cameron 1995)。しなしながら、会話などを録音・録画した生のデータを用いて、社会言語学的記述を行おうとするならば、まず考えられる方法は、実際に言語活動に参加した人々から、その言語活動の諸相についての意味づけや彼らの考え、感想などの情報を聞き出す方法であ

らう。

言語分析に人間関係の要素を積極的に持ち込むことを特徴とする「インタerviewアクションの社会言語学」に従事しているタネンは、データを収集したあとに「各参与者に個別に面接し、それぞれの参与者がどのように会話を解釈したかを確認する」という作業を行うことを重視している（Tanen 1992）。この「フォロアアップインタビュー（事後面談）」とよばれる方法を採用することによって、「データの記述がより精緻で正確なものになるし、補足説明を加えることができる」（橋内 1993: 39）のである。フォロアアップインタビューで得られた情報とデータの分析を併用することで、当該言語活動の場面や状況の特徴、参与者たちの発話内容についての解釈を彼らの内省によって補強することができ、収集したデータについての記述をより信頼性の高いものに行うことができるわけである（Faerch & Kasper 1987, Neustupny 1994）。

しかしながら、このような方法が奨励される背景には、データを観察者のみが分析しただけでは、言語活動に従事している当事者が実際に抱いていた認識（過程）についての情報が得られないので、インタビューなどをおして確認した上で、記述に取り組まなければならない（つまり、そうしなければ、その記述は正確さ・信頼性を欠く）という考えが潜んでいると思われる。このような「当事者主義」の方針は、記述の精緻化を目標

としているわけであるが、この方針を採用することがそもそも目指す記述の精緻化に繋がっているのかという点について改めて考慮してみ必要があるだろう。

この点について、エスノメソドロジストであるガーフィンケルが行った一つの実験を思い出してみるのは示唆的である（Garfinkel 1967: 26）。ガーフィンケルは、学生たちに彼らと他人の人と交わした会話について、本人たちがどのように理解していたのか、正確に述べさせるといふ課題を出した。要するに、フォロアアップインタビューと同じような作業をやらせたわけである。しかし、学生たちは、そんなことは不可能だといって、途中でその課題をやめてしまったという。それは単なる技術的な問題（時間や紙が不足しているなど）ではなく、その会話で交わされていた理解を正確に記述しようとすればするほど、さらに記述することがますます増えてしまうというのである。

そうであるならば、この実験が意味することは、人々はけっさよく曖昧な意味内容を伝達し合っているのだから、いつまでたっても正確に分かり合うことはできない、ということになっってしまうのだろうか。そうではないと思う。実際わたしたちは、通常、いちいち互いの発話内容を確認しなくとも、コミュニケーションを行っているからである。むしろ、こう考えてみたらどうだろうか。ある会話における発話や行為、出来事などの意味や理解の記述は、フォロアアップインタビューなどを通し

て、当事者たちよって多くを語られれば語られるほどそれだけ正確さが増すというのではなく、それらは人々の言語活動の実践の中で組織される語りや行為を通じて彼ら自身が示し、成し遂げていく現象である、と。

先取りして述べるならば、「当事者主義」を指針とする社会言語学的記述の一つの誤謬は、人々の会話や行為の意味の記述をインタビュなどの方法によって当該の言語活動の外側から入手しようとしてしまったために、彼らの実践に埋め込まれ、可視化されているはずである当事者の理解の表示を捉え損ねてしまったことである。

三 「レリヴァント」な記述の入手可能性

三・一 サックスのアイデア

統計的手法やフォローアップインタビューを用いるいき方ではなく、「レリヴァント」な社会言語学的記述を入手する方法として、先に言及したサックスのアイデアについてももう少し詳しく見てみよう。サックスは、人々の言語行為というものは社会におけるさまざまな場面に埋め込まれている相互行為(interaction)であるという観点を提出している。だから、そのような場面において、人々がどのような社会的アイデンティ

ティを担ってコミュニケーションを行っているのかということも、相互行為の中で、人々が互いにどのようなかわり合い方をしているのかという点から考えてみることができる。

このような考えの中で、サックス(Sacks 1972a, 1972b)は、独特のカテゴリ論を展開している。主なポイントは二つある。一つは、カテゴリは集合をなしていることである。たとえば、性のカテゴリ集合は「男性・女性」、家族の集合は「お父さん・お母さん・赤ちゃん……」というように。もう一つのポイントは、それぞれのカテゴリの担い手は、他のカテゴリの担い手に対して、ある特定の関わり方をするのが、一般的に、もしくは規範的に期待されていることである。たとえば、「赤ちゃん」は「泣く」、「母親」は「子供の世話をする」などといったことである。この期待は、カテゴリの担い手が実際にそのことにかんする知識を持っているかどうかには、関係がない。しかし、これらのカテゴリに結びついたさまざまな期待は、社会生活を営む上で重要な資源となっていると考えられるだろう。

このようなサックスのアイデアは、言語活動を観察・分析する者の注意を当該言語活動において人々がどのように相互にかかり合っているかという側面に向けさせるだろう。人々がどのような内容の発言をどのようなタイミングで行ったのか、そして、その際にどのような身体的配置であったかなどという

ことをとおして、言語活動に参与する人々の社会的アイデンティティは成し遂げられていくのである。以下では、社会的アイデンティティが人々の相互行為を通してどのように成し遂げられるかという点について具体的に分析を試みたいと思う。

三・二 「専門家」であること

分析で用いるデータは、ラジオトークを録音し、それを文字化したものの一部分である⁽²⁾。ラジオトークのテーマは「日本人」のOと「イギリス人」のPがイギリスの音楽について、それぞれの国の事情と関連させながら、対談をするというものである。以下の断片1に至るまで、OとPはイギリスの音楽グループ「マンフレッド・マン」について語っている。断片1はその続きである。なお、断片で使用されている記号については、注を参照のこと⁽³⁾。

断片1

O 　んで..それが終わって、まともなバンドになった

　　っていうか。あのマンフレッドマンはマイ

　　ケルダボが入って。あ⁽¹⁾（）

P 　↓ 「ま、ポップグループにな

　　りました」よね。

O 　↓ 「まあ..

P 　それまでは、ちよつと、オールバンドビー色が

　　「...強かった。」

O 　↓ 「色が強くて。

O 　↓ Ⅱで、フォーク色っていうか。Ⅱ

P 　↓ Ⅱそうね。Ⅱ

O 　↓ Ⅱうん。「フォークロック..

P 　↓ 「ポップディランの「...未発表曲を

O 　↓ 「ディランの

P 　歌「...たりとか。やつぱ

O 　↓ 「そうそうそうそう。

P 　マイテイクイーン::が一番...Ⅱ。

O 　↓ Ⅱマイテイクイーンがね。

P 　うん。

(中略)

O 　それか...ら..、え..とね。え..、セミディタッチト

　　サバーバンミスター「ジェームス○

P 　↓ 「あつ。あれはなかなか

　　い「い、きよく..でしたね。

O 　↓ 「うん（）いい曲なんですよ。

断片1のやりとりの内容を見ると、OとPは「マンフ

レッドマン」というグループについて、その音楽的特徴の説明をしていることがわかる。しかも、その説明を導入していくやりかたは非常に特徴的である。というのは、OとPは時に、相手の発話に重なって発話を始めたり、相手の発話に割り込んで発話を始めたりしているからである(断片中の↓に注目)。わたしたちは、通常、相手の発話と重複して話をしたり、途中で割り込んだりすることをできるだけ回避しながらコミュニケーションを行う(Sacks et al. 1974)。だからといって、そのような現象がコミュニケーションの中で起こらないわけではない。そうであるならば、断片1に見られるような重複や割り込みなどの行為が頻繁に起こる会話において、そのような現象自体になんらかの意味を見いだすことができるだろう。

このような重複や割り込みや繰り返しなどの行為を行うことで、OとPは、相手の発話内容にたいして「言い換え」「付け足し」「同意」を行っていることがわかる。このようにして、OとPは話題となっている音楽グループについて、専門的に語るることができるほどの知識を持っているというのを、それぞれの発話の機会でわざわざ、しかも、できるだけ早く表明しているのである。このように、音楽にかんする専門的知識を表示するこの特徴的方法を通して、OとPは自分たちが音楽の「専門家」という社会的アイデンティティであることを成し遂げているといえるだろう。

三・三 「日本人」「イギリス人」であること

けれども、OとPは常に「専門家」であるわけではない。彼らは自らの言語活動の目的に応じて、「専門家」以外の社会的アイデンティティで登場する場面がある。断片1に続く、断片2を見てみたい。

〔断片2〕

O ↓なんですか、このセミディタッチトサバーバン
ミスタージェームスって、この歌の内容は。

P //あのね「セミディタッチトっていうのは」ね、
O (一) (一) (一) 「うん。」

P 要するに、イギリスの…住宅事情というよね。

O うん。

(中略)

P ↓日本でいう一戸建て。

O 一戸建て。

P というのはね、完全なデタッチトハウスと

O いう「(一)ね。

P 「デタッチト。」

O こう、完全に、い、あの、あの…、離れてるからね。となり、両どなりから。

O ああ、は..は..は。
 (中略)
 P 「軒が」つながっている。だから、片方は、離れてる、片方がくつついてる。
 O は...:ん。
 P これが、セミディタツット。
 O セミディタツット。
 P で、普通のね、あの、要するに完全なディタツットハウスつてのは、すつごくね、お金がかかるんですね。
 O うん。
 P だから、かなりのお金もちじゃないとそういう家には住めない。
 O ほ..ほ..
 P で、普通の庶民が、一番高望みしても、
 O 「う..、セミディタツットぐらい。
 O 「うん。
 O ふ...:ん。
 P 「だから、それも、サバーバンというのは、郊外」のセミディタツット
 O 「郊外
 O うん。

P と、まあ、平凡な夢なんだな。これがね。
 O ほ..ほ..。平凡な〔 〕
 P 「アメリカンドリームじゃなくて、イングリッシュドリームの、まあ、平凡なイングリッシュドリーム。
 O これが、セミディタツットサバーバンミスタージェームス。
 P そうそうそうそう。
 O ふ...:ん。
 O 「うん。
 O ↓んじゃ、そう思って聞いて見るとね。(2・0)
 P で..聞きながら、じゃ、あと、細かい、あの..(0・5) 歌詞の内容つてか、その..、ね、内容を聞いた後でまた、「あの、お伺いしましょうか。
 P 「はい。
 P 断片2では、Oの「なんですか、このセミディタツットサバーバンミスタージェームスつて、この歌の内容は」という質問を受けて、Pが「セミディタツットサバーバンミスタージェームス」という歌の内容を説明するために、イギリスの住宅事情、とりわけ「セミディタツット」という住宅形態について語り始めている。このPの一連の語りは一種の「物語」に

なっていることがわかる。その物語は「セミディタツチト」という住宅形態と「サバーバン」ということばがイギリス社会においてどのような意味合いをもつのか、そして、それらはいかに(イギリス人にとつて)「平凡な夢」もしくは、「イングリッシェドドリーム」であるのかという「落ち」につながつていく。

一般的に「イギリス人」というカテゴリーに属する者はイギリスのことについて、「非イギリス人」よりも優先的に報告する資格をもつと期待されている。この物語は、「イギリス人」にとつては、たいいていの人が知っている、ごく普通の住宅事情であるという意味において、Pは「イギリス人」として、この物語を語っていると見えるだろう。

それにはたいして、この断片2において、Oは何者として登場しているのであろうか。まず、「イギリス人」というカテゴリーが「イギリス人・非イギリス人」というカテゴリー集合の一員であることを考えると、Oは「非イギリス人」として記述されると考えられるかもしれない。しかし、Pの個々の発話、たとえば、「日本でいう一戸建て」という表現は、「非イギリス人」というよりも、「イギリス人・アメリカ人・韓国人・日本人……」というカテゴリー集合の一員である「日本人」というカテゴリーを担う聞き手を想定して選択された表現であるように思われる。このような点において、Pの一連の発話は、ほかならぬ「日本人」であるO(と「視聴者」)に向けてデザイン

されているといえるであろう。

さらに、PとOがそれぞれ「イギリス人」「日本人」であることは、この断片2の中のターン(II話し手権)の配分にも特徴を与えていることにも注意したい。Pが物語を語っている間、Oはいびつちを打ってPの発話の進行を促したり、話のポイントを把握したという反応を示したりすることで、この物語の「聞き手」として登場している。断片1では、OとPはともにラジオの「視聴者」にたいする「専門家」として、同等な資格をもつて言語活動に参加していたことと比較すると、OとPがそれぞれ「日本人」「イギリス人」であることによつて、この場面におけるターンの配分が非対称になるのである。逆に、このようなターン配分が非対称的である相互行為のありかたをとおして、OとPはそれぞれ「日本人」「イギリス人」であることとを成し遂げているともいえるであろう。

ところで、断片2の後半におけるOの「んじゃ、そう思つて聞いて見るとね」という発話に注目してみると、人々の社会的アイデンティティというものがいかに彼らが従事している言語行動の目的に応じて変化するのか、ということがわかる。Oのこの発言は、それまで長く続いてきたPの物語を他の会話からくくり出しているように聞こえるからである。

この「くくり出す」というOの行為は、実はラジオトークという言語活動の特徴ともかかわっている。ラジオトークは、通

常、トークが行われている場面に居合わせない「視聴者」に向けられる公的なトークであるということがその特徴の一つであるが、Oの「んじゃ、そう思ってた聞いて見るとね」という発言は、まさに、このやりとりが行われている場面に実際は居合わせないラジオの「視聴者」に向けられているのである。先にも言及したようにこの会話は、音楽についての対談である。そうであるならば、断片2において、Pによって展開されたイギリスの住宅事情についての物語と音楽というテーマとの関連は薄いと見えるだろう。Oはこの発言を行うことで、このラジオトークのテーマ内容に敏感に応じた形で、イギリスの住宅事情についてのPの一連の物語を、まさに今話題となつていて曲を理解するために挿入された予備的な知識として位置づけているのである。

この発言を行うことによつて、Oはもはや「日本人」という社会的アイデンティティを担つてはいない。ラジオトークの「視聴者」にたいして、曲の聞き方をインストラクションするという活動を行うことを通して、Oはラジオトークの「司会者」という別の社会的アイデンティティを担うことになるのである。

以上のような分析によつて示してきたことは、ある人々がどのような社会的アイデンティティを担っているかということとは、相互行為における発話内容のデザインやターン配分の仕方やそ

の秩序、組織化において明らかになるといふ点である。念のために注意を喚起しておくならば、以上のような議論はインタビューという方法の有効性を問うていのではない。または、比較的ミクロな現象に焦点を当てるといつて、個々の言語活動の場面を超えた「国家」であるとか「学校」などの比較的マクロな概念を否定するわけでもない。ただ、上記で示した分析では、そのような概念と個々の人々が行う言語活動自体との関連づけについての「レリヴァント」な記述を入手する一つの分析の方法を示した限りである。

四 結語

そのときどきに人々が何者であるかは、ときに偶然的出来事に左右されながら展開される、相互行為のありかた・秩序・その組織化において示される。この小論では、この点について、会話分析の知見を導きの糸としながら示してきた。言語活動に参加している人々の理解を記述することを目指しながらも、「当事者主義」を指針とする社会言語学的記述が見落としていた側面は、ある記述が入手可能である際に、同時に入手可能であるはずの社会的出会いとしての相互行為の秩序や組織化のありかたであるといえるだろう。

人々は、社会の中で、必ずなんらかの社会的アイデンティティを担っている。なんらかの社会的アイデンティティを担っ

ているということ、すなわち、なんらかの言語的・非言語的活動に従事していること(もしくは、従事していないこと)である。人々が行う発話やそれに伴う身体的動作や道具を用いた組織的で秩序だった活動や方法自体が、社会的現実の部分を構成しているといえるであろう。そのため、人々がことばを用いて実際にやっていることを詳細に分析することも必要となるわけであるが、この小論では、そのような分析をするための一つの方法として、具体的なデータを会話分析の方法で分析してみた。もちろん、会話分析という方法を用いることは、何らかの正確さを目指しているわけではない。ただ、このような方法を採用することによって、「見えてくるもの」がある。それは、社会的出会いとして組織される相互行為において、社会的アイデンティティを理解可能なやり方で示していく人々の実践である。

(1) 「当事者主義」は「民事・刑事の訴訟において、当事者の申立がなければ訴訟の提起・取下げなどが行われない」ことを意味する法律用語であるが(広辞苑第4版による)、この小論ではそのような法的意味を含みせず、にこの用語を用いている。

(2) このラジオトークは一九九七年に放送された「横浜ラジオナイトフライデースペシャル」の一部分である。

(3) 断片の中で用いられている記号については以下の通り。

〔(複数行にまたがる角括弧) 参与者たちのこと

ばが重なっていることを示す。

|| (ことばとことばの間、もしくは行末と行頭に

置かれた等号) 途切れなくことばがつ

ながっていることを示す。

() (丸括弧) なにかことばが発せられているが、

聞き取り不可能であることを示す。

(1・0) (丸括弧でくくられた数字) その数字の秒

数だけ沈黙のあることを示す。

… (コロン) (列) 直前の音がのばされていることを示す。

。 (句点) 語尾の音が下がって区切りがついたこ

とを示す。

— 軒が (右線) 当該箇所の音が大きいことを示す。

(4) この小論は、第4回社会言語科学会での報告原稿を、

大幅に加筆修正したものである。

参考文献

Cameron, D. (1990) Demythologizing sociolinguistics: why language does not reflect society. in J. E. Joseph & T. J. Taylor (eds) *Ideologies of Language*. London,

- New York: Routledge, pp.79-93.
- Cameron, D. (1995) *Verbal Hygiene*. London, New York: Routledge.
- Fairch, C. & Kasper, G. (1987) *Introduction in second language research*. Clevedon, Philadelphia: Multilingual Matters.
- Garfinkel, H. (1967) *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- 櫻区城 (1999) 『キヤクノク』 ～～～ 野田雄.
 Labov, W. (1972) *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Neustupný, J. V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning, in T. Kandiah & J. Kwan-Terry (eds.) *English and language planning: A Southeast Asian contribution*, Singapore: Academic Press, pp.50-69.
- Sacks, H. (1972a) On the analyzability of stories by children, in J. J. Gumperz & D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics*, New York: Holt, Rinehart & Winston, pp.325-345.
- Sacks, H. (1972b) An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology, in D. N. Sudnow (ed.) *Studies in Social Interaction*, New York: Free Press, pp.31-74.
- Sacks, H., E. A. Schegloff & G. Jefferson (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation, *Language* 50: 676-753.
- Schegloff, E. A. (1987) Between micro and macro: context and other connections, in J. C. Alexander, B. Giesen, R. Muench & N. J. Smelser (eds.) *The Macro-Micro Link*. New York: Columbia University Press, pp.207-234.
- Tannen, D. (1992) Interactional sociolinguistics, in *Encyclopedia of Language and Linguistics*, Vol.3. Oxford: Pergamon Press, pp. 9-12.

二〇〇一年十一月一日受稿
 二〇〇一年十二月二十九日レヴェリーの審査を
 へて掲載決定
 (一橋大学大学院博士課程)